

"Subjectification" とは何か：言語表現の意味の根源を探る

深田 智

英知大学

chieft@sapientia.ac.jp

1. はじめに

言語表現の意味には、言語主体 (概念化者 (conceptualizer) ともいう。主として、話し手) が何をどのように解釈しているかが反映されている。したがって、この言語表現の意味における言語主体の役割を無視して、言語の意味を分析することはできない。

トローゴット (Traugott 1989, 1999 等) やラネカー (Langacker 1990b, 1998, 1999 等) は、言語主体と言語表現の意味とのこのような関係に注目し、意味変化や意味拡張を言語主体との関連で分析してきている。しかし、この両者の研究では、同じ "subjectification" (「主観化」あるいは「主体化」と訳される。トローゴットの "subjectification" は「主観化」、ラネカーの "subjectification" は「主体化」と訳されることが多い。) という用語が、異なる意味で用いられているばかりか、この2つの "subjectification" の関係も明らかにされてはいない。¹ 本論では、まず、トローゴットとラネカーの "subjectification" 研究を概観し、その違いを明確にするとともに、それぞれの問題点を挙げる (第2節)。次に、第3節で、発達心理学や神経心理学の知見を取り入れながら、主体 / 客体、主観 / 客観の概念を再規定し、その定義にしたがって、トローゴットとラネカーの "subjectification" を再解釈する。第4節では、第3節で規定した主体 / 客体、主観 / 客観、さらには、主観化あるいは主体化の概念を用いて、いくつかの言語表現の意味の拡張現象を実際に分析していく。その際、主観化と主体化の相互関係や主観化 / 主体化に関わる認知プロセス等についても考察していく。

2. "Subjectification" についての先行研究

言語表現に見られる意味の拡張現象を、主に、言語主体との関連で分析したものの中にトローゴットの研究とラネカーの研究がある。ここでは、この2つの研究を概観し、両者の違いを明

¹シュタイン (Stein 1995) によれば、"subjectification" という用語は、これまで、言語研究や文学研究の中でさまざまな意味で使われてきたということである。したがって、トローゴットやラネカー以外にも、言語表現の意味を主体との関連で分析しようとした研究は多々あるということになるのだが、ここでは、その一つとして、久野 (Kuno 1987) のエンパシー (共感, empathy) の概念を用いた研究を示しておこう。エンパシーとは、以下のような概念である。

- (i) Empathy: Empathy is the speaker's identification, which may vary in degree, with a person/thing that participates in the event or state that he describes in a sentence. (エンパシーとは、文中で述べられた出来事や状態に参与している人やモノに、話し手が様々な程度で同一化することをいう。)

例えば、ジョンとビルは兄弟であるとして、ジョンがビルを叩いたという状況を考えてみよう。その場合、次の3つの言い方が可能になる (もちろん、これ以外にも、受け身を使った言い方もある)。

- (ii) a. John hit Bill.
b. John hit his brother.
c. Bill's brother hit him.

久野は、この3つの文の違いを、話し手が誰に同一化しているのか、というエンパシーの違いとして捉えている。(ii-a) では、話し手は、ジョンとビルのどちらにも同一化していないとも、ジョンあるいはビルのどちらかに同一化しているとも考えられるのに対し、(iib) では、his brother という表現からジョンに、(iic) では、Bill's brother という表現からビルに、それぞれ同一化している、というのである。このように、エンパシーとは、話し手が誰の (何の) 立場 (視点) にたつて事態を把握するか、ということに関わる概念である。この概念は、実は、ラネカーの規定する主体化の概念と密接に関わっていると思われるが、具体的にどのような関係にあるのかは今のところ明らかになってはいない。

らかにするとともに、それぞれの研究における問題点を指摘する。

2.1. トローゴットの研究とその問題点

トローゴットは、さまざまな文法化の事例を研究していく中で、文法化が進むにつれて、言語表現の意味が、徐々に、話し手の主観的な信条や態度などを表わすようになっていくことに気付いた。トローゴットは、このような意味変化を“subjectification”(一般に、「主観化」と訳される)と呼んでいる。以下に、この定義を示す。

- (1) “subjectification”とは、命題内容(すなわち、話し手が語っている事柄)に対する話し手の主観的な信条や態度に基づく意味が、言語表現の意味の中に徐々に組み込まれていくという語用論的-意味論的過程のことをいう (“... ‘subjectification’ refers to a pragmatic-semantic process whereby ‘meanings become increasingly based in the speaker’s subjective belief-state/attitude toward the proposition,’ in other words, towards what the speaker is talking about ... (Traugott 1995: 31).”).

トローゴットは、この“subjectification”の過程には、以下のような3つの意味的-語用論的傾向(Semantic-pragmatic Tendency)が関与しているという(Traugott 1989, Traugott and König 1991 など)。

- (2) a. 意味的-語用論的傾向 I:
外界の事態に基づく意味から言語主体(必ずしも話し手とは限らない)の評価や知覚、認識などの内的状態を反映した意味へ
- b. 意味的-語用論的傾向 II:
外界の事態あるいは内的状況に基づく意味からテキスト内の関係を表わす意味へ
- c. 意味的-語用論的傾向 III:
意味は、ある状況に対する話し手の主観的な信条や態度などを中心に表わすようになる

いずれの傾向に基づいて意味が変化しても、言語表現の意味は、変化前よりも主観的なものとなっている。²

ここで、この3つの意味的-語用論的傾向に基づく“subjectification”の具体例をいくつかを見ていくことにしよう。まず、次の2つの *after* の意味について考えてみよう。

- (3) a. Come *after* me.
b. I saw him *after* three hours.

(3a) の *after* は、外界の物理的存在物どうしの具体的な空間関係を表わすために用いられているのに対し、(3b) の *after* は、言語主体の評価や知覚、認識などに基づく抽象的な時間関係を表わすために用いられている。したがって、このような空間から時間への意味変化は、意味的-語用論的傾向 I が関与している意味変化の一例であるといえる。

また、*after* は、次のような用法も発展させてきている。

- (4) *After* we glance at the headlines, we went to work.

この *after* は、テキストレベルの接続関係を表わすために用いられている。このような意味への変化は、意味的-語用論的傾向 II にそった意味変化である。

最後に、(5) に挙げた2つの *since* の意味を比較してみよう。

- (5) a. I have done quite a bit of writing *since* we last met.

² トローゴットの以前の研究 (Traugott 1989 や Traugott and König 1991 など) では、意味的-語用論的傾向 I、意味的-語用論的傾向 II、意味的-語用論的傾向 III の順で “subjectification” が進むと考えられていたが、1995 年の論文 (Traugott 1995) では、この一方向性は修正されている。

b. *Since you are so angry, there is no point in talking with you.*

(5a) の *since* は、(4) の *after* 同様、テキスト内の関係を表わしている。しかし、(5b) の *since* は、2つの事態間の因果関係を示している。因果関係とは、話し手の主観的判断によって決定されるものである。したがって、(5a) から (5b) への *since* の意味変化は、意味的 - 語用論的傾向 III にそった意味変化の例であるといえる。

ここで注意したいのは、意味的 - 語用論的傾向 I における「言語主体」と、意味的 - 語用論的傾向 III における「話し手」の違いである。トローゴットの主張をよく吟味してみると、言語主体とは、言語を使って自分の把握したことを表現できる主体、すなわち、話し手だけでなく話し手以外の他者をも含む人間一般、言い換えれば、認知主体あるいは概念化者となれるものの総称であるのに対し、話し手とは、実際にある事態のある時点、ある場所で述べている言語主体のことである、と分かる。*after* における空間から時間への意味変化が意味的 - 語用論的傾向 I に基づく "subjectification" とされていたのは、時間というものが、人であるなら誰もが同じような知覚・判断をすることのできるものであるからである。一方、*since* の意味における因果関係の意味の成立が意味的 - 語用論的傾向 III に基づく "subjectification" とされていたのは、何を何の原因とし、何を何の結果とするかは、話し手個人の判断に基づくものだからである。

ところで、トローゴットは、最近の研究 (Traugott 1999 など) の中で、"subjectification" が起こると、それに伴って、"intersubjectification" (これは、「間主観化」あるいは「相互主観化」と訳されている) という現象も起こると主張している。"intersubjectification" とは以下のような現象である。

- (6) "intersubjectification" とは、認知的意味においてもまた社会的意味においても、聞き手あるいは読み手への話し手あるいは書き手の配慮に関わる含意が、言語表現の意味として表わされるようになる、という意味変化のことをいう ("Intersubjectification is the semasiological process whereby meanings come over time to encode or externalize implicatures regarding SP/W's attention to the 'self' of AD/R [=addressee/reader]'s in both an epistemic and a social sense." (Traugott 1999)).

自分の個人的な意見 (主観) を相手に受け入れてもらうためには、話し手は、聞き手も主観を持つ一人の人間であることを意識し、そのような聞き手の主観に配慮した話し方をする必要がある。ゆえに、トローゴットは、"subjectification" が起こるのに伴って、"intersubjectification" も起こると考えたのである。"intersubjectification" の例としては、*actually* や *pray* などにおける次のような意味の成立が挙げられる。

(7) *actually*

No, I don't think I was. No, I was determined to get married *actually*.

(いいえ、私がそうだったとは思わないわ。私は (信じてもらえないかも知れないけど) 本当に結婚するように決められていたのよ。)

(8) *pray*

Pray, calm yourself.

(どうぞ気を落ち着けて)

この "intersubjectification" という現象にも注目して分析を行っているということは、トローゴットが、話し手と話し手が語っている対象との認知的な関係だけでなく、コミュニケーションの場における話し手と聞き手という社会的な関係にも注目して、言語表現の意味を分析していることを示している。このような研究は、発話の場における話し手の役割には、対象を認識するという認知的な役割だけでなく、認識した事柄を聞き手に伝えるという社会的な役割もあることを再認識させてくれるだけでなく、意味論と語用論とを結びつける非常に重要な研究であると思われる。

しかし、トローゴットの研究には、まだいくつかの問題が残されている。まず第 1 に、変化

前の意味がどのような意味であった時に、上述した意味的-語用論的傾向のどのタイプに基づく“subjectification”が起こるのかが明らかになっていない。

第2に、トローゴットとケーニッヒ (Traugott and König 1991) では、意味的-語用論的傾向の I と II に基づく“subjectification”はメタファーと、意味的-語用論的傾向の III に基づく“subjectification”はメトニミーと大いに関連しているとしているが、それぞれの“subjectification”に、具体的にどのような認知プロセスが関与しているかはもう少し吟味する必要があると思われる。³

第3に、意味的-語用論的傾向 I における「内的状態」と意味的-語用論的傾向 III における「信条や態度など」との区別が明確でない。

第4に、トローゴットのいう意味的-語用論的傾向 II に基づく“subjectification”は、意味変化というよりは、文法機能あるいは文法範疇の変化である。もちろん、意味が変われば、文法機能や文法範疇が変わることもあるから、両者は無関係とはいえないのだが、他の2つの意味的-語用論的傾向に基づく“subjectification”が、文法機能ではなく意味の変化のことをさしているということを考慮すると、これらを“subjectification”という1つの用語で説明するのは問題であると思われる。

そして、第5に、トローゴットは、自身の“subjectification”研究の中で扱っている現象の一部が、次節で述べるラネカーの“subjectification”（こちらは、「主体化」と訳されることが多い）研究の中でも分析されているにも関わらず、両者は全く別の（無関係な）現象であるとして、両者の関係を明らかにしようとはしていない。同じ現象を扱っている以上、両者のいう“subjectification”が、どのような関係にあるのかを明らかにしていく必要があると思われる。

次節では、トローゴットと同じように“subjectification”という用語を用いて、言語表現の意味変化を分析してきているラネカーの研究 (Langacker 1990b, 1998, 1999) を概観し、トローゴットの“subjectification”との違いを明らかにするとともに、その問題点を挙げることにする。

2.2. ラネカーの研究とその問題点

まず、*across* の意味変化について考えていくことにしよう。(9) にみられるように、*across* は、基本的には、実際の物理的移動の経路を表わす言語表現である。

(9) The child hurried *across* the street.

この例では、トラジェクターは子供、ランドマークは通りであり、両者を関連づけているのは、トラジェクターの実際の物理的移動であると考えられる。では、次の4つの文における *across* の意味はどうであろうか。

- (10) a. The child is safely *across* the street.
 b. You need to send a letter? There's a mailbox *across* the street.
 c. A number of shops are conveniently located *across* the street.
 d. Last night there was a fire *across* the street.

(9) の *across* とは異なり、(10) の *across* は、いづれも、トラジェクターの移動の経路ではなく、トラジェクターの位置を表わすために用いられている。ラネカーは、移動の具体性という観点から、(10a-d) 間にいくつかの差異を認めている。(10a) では、移動物は子供(トラジェクター)であり、その移動の結果その子供が至った位置が *across* によってプロファイルされている(プロファイルされている部分とは、その言語表現が意味している対象、すなわち、注意の焦点となっている対象のことである)。これに対して、(10b-d) では、主語で表わされたトラジェクターは実際には移動しない。(10b) では、*across* のもとの意味である物理的移動の意味が未来における聞き手の移動の可能性へと変化しており、その移動の結果聞き手が至る位置(郵便ポストの位

³ トローゴットとケーニッヒ (Traugott and König 1991) では、メタファーとメトニミーは、どちらも語用論的推論の一種である、という主張がなされている。

置)が、*across* によってプロファイルされている。また、(10c)における移動は、非特定の、総称的な人たちが行なう可能性のある移動であり、*across* によってプロファイルされているのは、その移動の着点である。また、(10d)は、外界におけるいかなる移動をも表わしてはいない。ここでの移動とは、ある地点(たいていの場合、発話時に話し手がいる位置)を参照点とし、そこを起点としてトラジェクターである火事の現場へと動いていく話し手(概念化者)の視線の先(すなわち、注目点)の移動である。⁴そして、*across* は、話し手の心的スキャニング(mental scanning)によって作られる心的経路(mental path)の着点をプロファイルしていると考えられる。

ここで注意したいのは、話し手の視線の先の移動は、(9)や(10a-c)の *across* の意味の中にも内在しているという点である。トラジェクターの実際の物理的移動に関わる意味を客観的意味、話し手の視線の先の移動に関わる意味を主体的意味とすると、(9)は、客観的意味が最も顕在化している *across* の例であるといえる。トラジェクターとランドマークを関連づけているのは、トラジェクター自身の実際の物理的移動である一のものに対し、(10d)は、この客観的意味を完全に失い、かわりにそれに内在していた主体的意味だけを顕在化している *across* の例であるといえる。つまり、(9)、(10a-d)における *across* の意味の違いは、この客観的意味と主体的意味との相対関係からきているのである。*across* の意味における客観的意味の割合は、(9)-(10a)-(10b)-(10c)-(10d)の順に減少し、かわりに、それに内在している主体的意味の割合が増加しているのである。

ラネカーが“subjectification”と呼んでいるのは、この *across* に見られるような意味変化のことである。その定義は以下の通りである。

- (11) “subjectification”とは、言語表現の語彙的意味の中に本来内在している、そしてその意味で、言語表現の語彙的意味の最も深い特性を構成している、心的操作が顕在化することをいう(Subjectification is the ‘laying bare’ of conceptual operations which are immanent in the original lexical meanings and in that sense constitute their deepest properties (Langacker 1998: 88)).⁵

across の例で見たように、ラネカーの“subjectification”においては、客観的意味が徐々に薄れていくかわりに、それと反比例して、主体的意味が顕在化してくるという段階的な推移がみられる。⁶この段階性は、ラネカーの理論の中で、次のように図示されている。

⁴ラネカー(Langacker 1998, 1999等)は、ここで移動しているのは、話し手の視線の先ではなく、概念化者の視線の先であるといっている。彼の理論の中では、概念化者(概念化できるすべての人を指す)と話し手とは明確に区別されているはずなのだが、後で述べるように、“subjectification”研究では、この両者が混乱して用いられていることが多い。

⁵この定義は、Langacker(1990b)の“subjectification”の定義を修正したものである。中村(2000)は、Langacker(1990b)における主体化の考え方を以下のようにまとめている。

- (i) 語彙のプロファイルする叙述内容の一部が、認知プロセスに転換して、語彙が文法的要素へと変化する過程(文法化の過程)で、その認知プロセス(のみ)を表わすようになる過程。

ラネカーは、この“subjectification”の概念を眼鏡の例を用いて説明している。机の上に置いてある眼鏡は、概念化者(主体)にとって、概念化の対象となるものである。しかし、概念化者が眼鏡をかけてものを見ている場合、その眼鏡は、主体の一部となっており、概念化の対象ではない。このように、本来概念化の対象であったものが主体と融合することによって主体的な役割を担うようになることを“subjectification”と呼んでいたのである。しかし、この説明では、主体的な意味が客観的な意味の中に内在しているものであるということまでは理解できない。そこで、出されたのが、(11)の“subjectification”の定義である。

また、Langacker(1990b)では、「主体性(subjectivity)」についても議論されている。主体とは、一般に、話し手のことであると思われているが、実際には、話し手だけでなく、話し手と対話している聞き手やその対話が行われている発話の時間・場所も主体としての役割を果たしていると考えられる。これらの要素(話し手、聞き手、発話の時間・場所)は、発話のグラウンド(ground)と呼ばれる。概念化の対象となっているもの(すなわち、言語表現で表わされる対象)をこのグラウンドと関連づけて解釈するという概念操作が、グラウンディング(grounding)である。例えば、話し手が言語表現として表わされるか否かは、話し手の主体性をはかる目安となる。次の例をみてみよう。

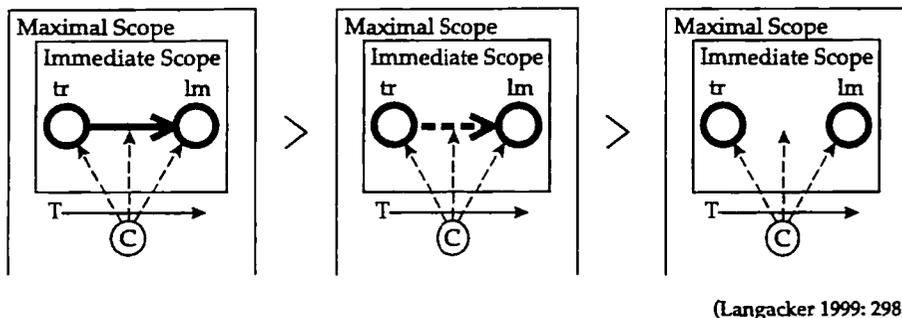


図1

図1では、客観的意味の希薄化 (attenuation) の過程は、トラジェクターとランドマークを結ぶ矢印が、実線から破線へ、そして最終的にはこの矢印の不在へと変わっていくことによって表わされている。矢印が消えた最終段階では、トラジェクターとランドマークを関係づけているのが、概念化者 (最も一般的には話し手) の心的スキャニング (概念化者 (C) からトラジェクター (tr) とランドマーク (lm) に向かう点線の矢印で示されている) だけであるから、この段階における言語表現の意味とは、最も主体的な意味であるといえる。

ここで、上述した *across* の例における "subjectification" を図示すると、以下ようになる (Langacker 1999: 300 参照)。R は、話し手がトラジェクターの位置を決定する上で起点とした参照点である。

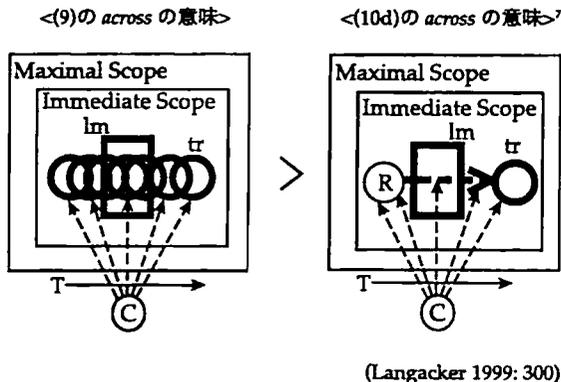


図2

ここで注目したいのは、最も客観的な意味を表わす (9) の *across* と、最も主体的な意味を表わす (10d) の *across* とでは、概念化者の心的スキャニングによって作られる心的経路の起点、すなわち、参照点となるものが異なっているという点である。前者では、トラジェクターの実際

- (ii) a. Sue is sitting across the table from me.
b. Sue is sitting across the table.

(iia) では、*me* という言語表現によって、話し手が概念化の主体としてだけでなく、概念化の対象としての役割も担っていることが分かる。一方、(iib) では、*me* のような話し手を表わす言語表現は存在しない。話し手は表現する主体、すなわち、概念化の主体としての役割のみを担っているのである。したがって、(iia) と (iib) を比較した場合、(iia) よりも (iib) のほうがより主体的な表現となっているといえることができる。

° 注意しておくが、すべての言語表現には、必ず概念化者の解釈が反映されているのだから、概念化者の解釈が全く入り込まない、完全に客観的な表現というのは存在しない。ただ、より客観的な表現 (概念化者の解釈によらない、客観的な要素の多いもの) があるだけである。

の物理的移動によって客観的に決定されるある場所、すなわち、トラジェクターが最初にいた地点であるのに対し、後者においては、話し手が発話時にいる地点あるいは話し手が主観的に選んだある地点である。このことから、ラネカーは、*across* における "subjectification" とは、参照点の "subjectification" (ここでは、これを「参照点の主体化」と呼ぶことにする) であるとする。この *across* の意味における "subjectification" には、移動の種類と移動物という2つの側面の希薄化が伴う。*across* によってプロファイルされる移動は、実際の物理的移動から、物理的移動の可能性へと変化し、最終的には失われている。これは、物理的移動の希薄化である。また、移動物も、オンステージ上の焦点化された参与者である子供から、オフステージ上の聞き手に、さらには、非特定の、総称的な人たちへと変化し、最終的には、話し手自身の注目点となっている。これは、移動物の希薄化である。

ラネカーは、"subjectification" として捉えられる意味変化の中には、上述した *across* の意味変化の他に、次のようなものもあると述べている (Langacker 1998, 1999)。それぞれの言語表現における、最も客観的意味と最も主観的意味を挙げるとともに、(ある場合には) ラネカーがこれらの言語表現の意味変化を示すために用いた図も挙げておく。

(12) *rise, fall, ascend, descend*

a. (客観的意味)

The balloon {*rose / fell / ascended / descended*} rapidly.

b. (主観的意味)

Beyond the 2000 meter level, the trail {*rises / falls / ascends / descends*} quite steeply.

(13) *go, run, climb*

a. (客観的意味)

The hiker {*went / ran / climbed*} up the hill.

b. (主観的意味)

The new highway {*goes / runs / climbs*} from the valley floor to the senator's mountain lodge.

これらは、いわゆる「主体移動 (subjective motion)」の意味を表わすようになった言語表現の例である。

また、ラネカーは、*be going to* における近未来の意味の成立や助動詞の認識的用法の成立も、"subjectification" の一例として捉えられるとしている。これらは、トローゴットの "subjectification" 研究の中でも分析されてきている現象である。

(14) *be going to* における近未来の意味の成立

実際には、(10d) における参照点は、話し手が発話時にいる場所であることが多い。その場合、(10d) の *across* の意味は、左下の図のように、CとRが同じものとなる(このことは図ではCとRとを結ぶ点線で表わされている)。ラネカー (Langacker 1990) では、(10d) の意味として、この図をさらに簡略化させた右下の図のようなものが提示されていた。

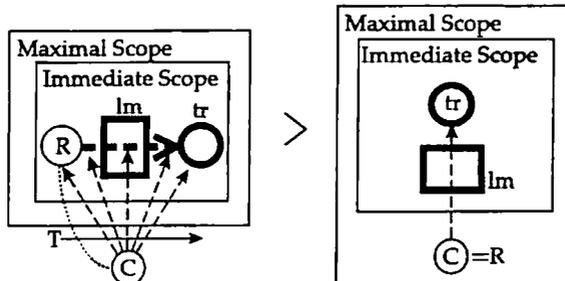


図1

- a. (客観的意味)
 He *was going to* mail the letter (but couldn't find a mailbox).
 (彼は手紙を出すために(ポストに)向かったが、ポストを見つけられなかった)
- b. (主体的意味)
 It's *going to be* summer before we know it.
 (知らぬ間に夏が近づいてきた)

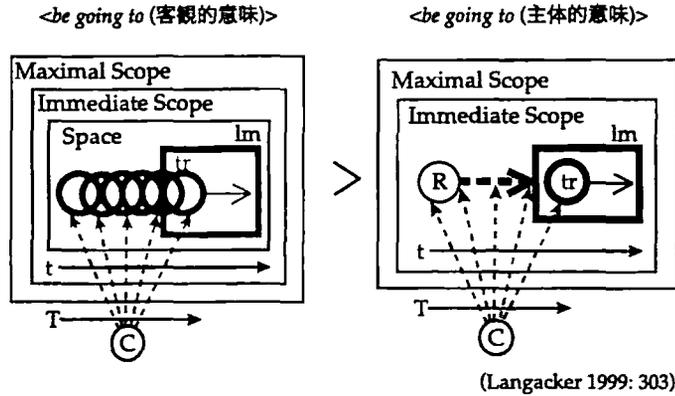


図3

(15) 英語の助動詞の認識的用法の成立

- a. (客観的意味)
 本動詞用法 (主語で表わされたトラジェクターが、ある行為を行う欲求、能力、知識、力、強さ、などを持っている、という物理的領域における力のダイナミクスを表わす)
- b. (主体的意味)
 助動詞の認識的用法
 There *may be* some rain tonight.
 (今晚いくらか雨が降るかもしれない)

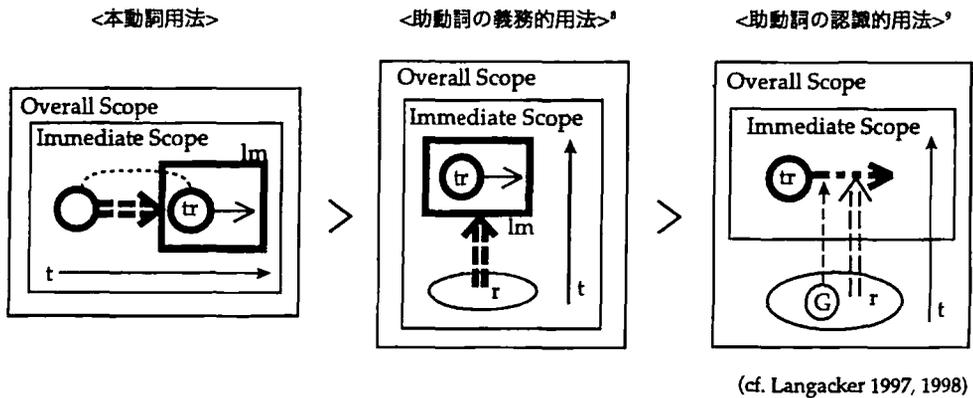


図4

¹この図の例としては、次のような義務的用法が挙げられる。

(i) Passengers *should* confirm their reservations two days in advance.
 (乗客は2日前に予約を確認すべきだ。)

さらに、<持つこと>のメタファー的写像として説明されるような次の *have* の意味変化も、"subjectification" の一例であるという。

(16) *have* の意味変化

a. (客観的意味)

Be careful — he *has* a knife!
(注意しろ！やつはナイフを持ってる！)

b. (主体的意味)

We *have* some vast open areas in the United States.
(アメリカ合衆国には、途方もなく広大な地域がいくつもある)

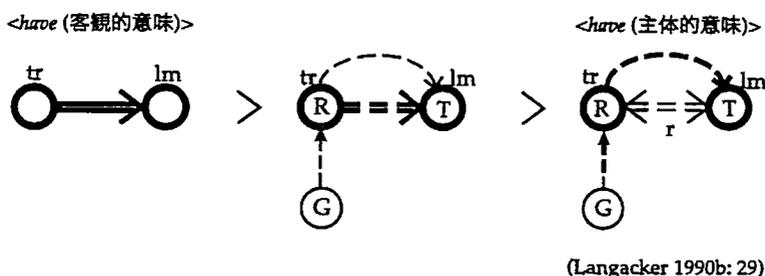


図5¹⁰

この *have* の意味変化では、客観的意味で表わされていたトラジェクターの物理的所有の意味が失われ、かわりに、概念化者によるトラジェクターからランドマークへの心的接触 (mental contact) に関わる意味が顕在化している。この心的接触は、主体的意味を表わす右の図では、太い破線の矢印によって示されている。また、この心的接触によってトラジェクターとランドマークが関連づけられるということは、両者を結ぶ二重破線の両方向矢印 *r* (relation、関係) によって示されている。

これらの例から、ラネカーは、"subjectification" には少なくとも以下の3つのタイプがあると考えているようである (Langacker 2001, p.c.)。

- (17) a. 参照点の主体化
- b. 移動の主体化
- c. 力の主体化

参照点の主体化とは、参照点が客観的關係によって決定される具体的な場所・地点から、主体によって主観的に決定される場所・地点 (時には、漠然とした状況であることもある) へと変わることである。これは、*across* や *be going to* の意味変化に見られる。*across* の場合には、主体によって主観的に決定される場所・地点 (主として、話し手自身が発話時にいる場所) が、*be going to* の場合には、主体 (話し手) が存在している現実世界の今ある状況が、それぞれ、変化後の参照点となっている。

移動の主体化とは、物理的・具体的移動が注目点の移動に変わることである。このタイプの

⁹ この認知的用法における図の中のトラジェクターとは、必ずしも主語で表わされたものというわけではない。もちろん、次のような認知的用法においては、主語の「彼等」が図中のトラジェクターに相当するが、(15b) の例文では、主語の *there* ではなく、雨が図中のトラジェクターに相当する。

(i) They *should* be able to find what they need.
(彼等は自分達が必要なものを見つけることができるはずだ。)

¹⁰ *have* の意味変化において、まん中の図に相当するとラネカーが考えている例は、所有ではあっても、実際の物理的所有を表わしているのではない、*I have certain rights* のような例である。

主体化は、*across, rise, fall, ascend, descend, go, run, climb, be going to* の意味変化に見られる。

力の主体化とは、物理的・具体的力が社会的あるいは心理的(ラネカーの用語でいうと、「経験的」)力へと変化することをいう。これは、英語の助動詞の認識的用法の成立や *have* の意味変化に見られる主体化である。ラネカーは、英語の助動詞の認識的用法の成立では、物理的・具体的力から社会的な力へ、さらには、現実にはそのまま展開し続けようとする勢い (evolutionary momentum) があるとする主体の心的推測 (mental extrapolation) へという意味での力の主体化が、また、*have* の意味変化では、具体的・物理的所有から社会的・心理的所有(これは、心的接触と呼ばれていた)へという意味での力の主体化が、それぞれ、見られるという。

このように見てくると、ラネカーのいう "subjectification" が、行為者としての主語の行為コントロール力が下がることと深い関係があることが分かる。トラジェクターがある行為を実際に行っていたり、ある行為を行う具体的・物理的な力を持っていたりする場合には、客観的意味が顕在化し、そのような行為コントロール力を失った場合には、トラジェクターとランドマークの関係づけに関する概念化者の役割が顕在化し、結果として、その言語表現が主体的意味を表わすようになるのである。¹¹

以上のことから、ラネカーの "subjectification" とは、概念化者 (subject of conceptualization、基本的には話し手) と概念化の対象 (object of conceptualization) との関係に注目することで捉えられる現象であることが分かる。¹² これは、トローゴットの "subjectification" が、話し手と話し手が語っている命題内容との認識論的な関係だけでなく、発話の場における話し手と聞き手との社会的な関係にも注目することで捉えられる現象であったのは大いに異なる。

次に、ラネカーの "subjectification" 研究における問題点のいくつかを挙げていくことにしよう。まず、第1に、ラネカーが "subjectification" の定義の中で述べた「心的操作」とは何か明らかになってはいない。ラネカーが "subjectification" という用語を用いて説明しようとした現象は、以下のような意味変化である。

(18) a. *across* の意味変化:

トラジェクターの実際の物理的移動の消滅、参照点が概念化者の位置に変化、心的スキヤニングの顕在化

b. *rise, fall, ascend, descend, go, run, climb* などに見られる主体移動の意味の成立:

トラジェクターの実際の物理的移動の消滅、心的スキヤニングの顕在化

c. *be going to* の近未来の予測の意味への変化:

トラジェクターの実際の物理的移動の消滅、参照点が現状に変化、心的スキヤニングの顕在化

d. 助動詞の認識的用法の成立:

トラジェクターの実際の物理的力の消滅、現実がそのまま展開していくであろうという話し手の心的推論への力の源の変化

e. *have* の意味変化:

¹¹ さらに、ラネカーは、次にみるような *get* の意味変化も "subjectification" の一例であるという。

(i) a. (客観的意味) Sue *got* (herself) appointed to the governing board.

b. (主体的意味) Another bank *got* robbed last night.

確かに、(ia) よりも、(ib) のほうが主語の行為性 (agentivity) あるいは行為コントロール力は減少している。しかし、これを "subjectification" と呼ぶ必要があるのか(つまり、主語の行為コントロール力の減少と呼んでもよいのではないか) という疑問は残る。

¹² トローゴット (Traugott 1999) は、ラネカーのいう "subjectification" を、統語的主語から話し手へのパースペクティブ転換であると述べている。しかし、この解釈には、少し誤解がある。なぜなら、ラネカーが「概念化者」と呼んでいるのは、話し手だけではないからである。ラネカーが「概念化者」と呼んでいるのは、概念化を行うことのできるすべての主体である。ゆえに、ラネカーのいう "subjectification" では、話し手だけでなく聞き手や第三者も問題となる(実際には、後の議論でも述べるように、ラネカーのいう "subjectification" でも、話し手だけが問題となっている場合が多いのだが)。

物理的所有から社会・心理的所有への変化

心的操作とは、*across* などの分析にみられる心的スキヤニングのことであろうか。それとも、心的スキヤニングと密接に関わる参照点構造のことであろうか。それとも、助動詞の認識的用法の成立の分析においてみられた、心的推論のことなのであろうか。それとも、これらすべて、そして、それ以外の何かを含むようなものなのであろうか。¹³

第2に、(17)における参照点の主体化は、他の2つの主体化とは質的に異なる。なぜなら、参照点というのが、そもそも、概念化者の主観と無関係に決定されるものではないからである。客観的意味における参照点も、その参照点自体がはじめから参照点として物理世界の中に存在していたわけではない。他の対象との関連の中で、概念化者が主観的に選んだものである。

第3に、参照点の主体化には、実は、2種類あると考えられる点である。*across* の意味変化を例にとってみると、最も主体的な意味を表わしているとされる(10d)の用法の参照点は、話し手が発話時にいる地点とも、話し手がその文脈に合うように主観的に選んだある地点ともとれる。つまり、参照点の主体化には、主体自身が概念化の対象の一部として機能するという意味での主体化と、主体が主観的にある地点を参照点とするという意味での主体化の2種類があるのである。両者は、全く違う状況であるから、区別して分析していく必要がある。

第4に、ラネカーは、*be going to* に見られる空間から時間への意味変化を、トラジェクターがはじめにいた場所から現状へという参照点の変化として説明しようとしているが、なぜそのような参照点の変化が可能になったのかに関しては、何の説明もしていない。これを説明するためには、ホッパーとトローゴット(Hopper and Traugott 1993)のように、*be going to* が用いられるコンテキストにも注目し、そこから生じる語用論的推論等にも注目して分析していく必要があると思われる。

第5に、助動詞の義務的用法、認識的用法の意味の成立に関しては、力のメタファー的写像であるとする研究者もいる(Talmy 1988, Sweetser 1990 等)。この力のメタファー的写像とラネカーのいう力の主体化は異なる現象を指しているのではあろうか。¹⁴

第6に、ラネカーとのパーソナルコミュニケーション(Langacker 2001, p.c.)から、彼が"subjectification"には(18)で挙げた以外のものもあると考えていることが分かったが、それがどのようなものと予測されるのかという疑問に対する明確な答えを得ることはできなかった。もちろん、彼自身も述べていたように、このことは、今後さまざまな言語事例を詳細に分析していく中で明らかになっていくであろうと思われるが、そもそも、ラネカーのいう"subjectification"という現象自体が十分に規定されたものとは言い切れないために、このような予測さえ不可能な状態に陥ってしまったと思われる。

第7に、ラネカーは、はじめ、"subjectification"という現象を概念化者(概念化を行うことのできるすべての主体)との関連で捉えようとしていたにもかかわらず(注4、注5参照)、助動詞の認識的用法の成立を説明する際には、概念化者ではなく、話し手との関連で説明しようとしている。また、他の"subjectification"の例においても、そのほとんどが、概念化者ではなく、話し手を想定して説明がなされている。このことは、ラネカーのいう"subjectification"においては、概念化を行うことのできるすべての主体という意味での概念化者ではなく、実際にあるコンテキストの中である事態を解釈している話し手が重要な役割を果たしている、ということの意味しているのではないだろうか。

もちろん、ラネカーが、言語表現の意味記述の中で、概念化できるすべての主体を指して「概念化者」という用語を用いたのには理由がある。それは、ラネカーが、言語表現の意味というものは、話し手だけではなく、聞き手も含めたすべての主体に理解可能なものであると想定し

¹³この点に関しては、どうやら、ラネカー自身もよく分かっていないようである(Langacker 2001, p.c.)。

¹⁴どちらの説明であれ、なぜそのようなメタファー的写像あるいは主体化が起こりえたのかということに関する言及は見られない。この「なぜ」にも答えることで、はじめて、十分な説明となると思われる。これに答えるためには、その言語表現が用いられる文脈や状況を考慮し、そこから生じる語用論的推論等にも目を向ける必要がある。

ているからである。しかし、実際には、生まれ、育ち、経験が違い、当然意味づけの仕方も違う異なる人間どうしの中で、同じ言語表現が全く同じ意味で用いられていることなどありえない。さらに、発話場面においては、話し手と聞き手は、交互にその役割（つまり、発話生成者としての役割と発話理解者としての役割）を変えていると考えられるのだが、ラネカーのように、この両者を一括りに「概念化者」としてしまえば、このようなコミュニケーションのダイナミックな側面を正確に捉えることができなくなってしまう。これらのことから、概念化できるすべての主体を概念化者として一括りにしてしまえば、十分な意味研究はできないと思われる。したがって、言語表現の意味を考える上では、話し手と（概念化できるすべての主体という意味での）概念化者を区別し、前者の役割を重視して分析していく必要があると思われる。

以上のようなラネカーの“subjectification”研究の問題点と前節で挙げたトローゴットの“subjectification”研究の問題点を解決するために、次節では、まず、主体／客体、主観／客観などの概念を発達心理学や神経心理学の知見を交えながら再規定し、両者の研究を再解釈していくことにする。

3. 主体／客体と主観／客観

ここでは、まず、発達心理学や神経心理学の知見を交えながら、主体／客体、主観／客観の概念を再規定し、その後、これらの概念を用いて、トローゴットとラネカーの“subjectification”を再解釈していくことにする。¹⁵

まず、主体／客体であるが、これは、発達心理学の知見（浜田 1995 など）を参考に、以下のように規定することにする。

(19) <主体と客体>

主体：自己

客体：他者

発話場面においては、2人の主体、すなわち、話し手と聞き手が存在している。話し手にとっての主体とは、話している自分自身であり、話し手にとっての客体とは、自分の話を聞いている聞き手である。また、聞き手にとっての主体とは、聞いている自分自身であり、聞き手にとっての客体とは、話をしている話し手である。

次に、主観／客観であるが、これは、主体／客体と区別して、以下のように規定することにする。

(20) <主観と客観>

主観：主体が知覚し、判断、認識、推論した内容。

客観：主体の知覚、判断、認識、推論の対象となるもの。主体の認識作用の対象（概念化の対象）となるもの。

例えば、話し手にとっての主観とは、話し手が知覚し、判断、認識、推論した内容であり、話し手にとっての客観とは、話し手の知覚、判断、認識、推論の対象となるもの（話し手にとっての概念化の対象）である。また、聞き手にとっての主観とは、聞き手が知覚し、判断、認識、推論した内容であり、聞き手にとっての客観とは、聞き手の知覚、判断、認識、推論の対象となるもの（すなわち、聞き手にとっての概念化の対象）である。以上の関係を図示すると、図6（次ページ参照）のようになる。

次に、このように規定した主体／客体、主観／客観の概念を用いて、トローゴットとラネカーの“subjectification”を再解釈していくことにしよう。

2.1の(1)と(2)から分かるように、トローゴットのいう“subjectification”とは、外界の事態（すなわち、客観）に基づく意味から、話し手の信条や態度（すなわち、主観）に基づく意味へ、という意味変化のことである。これを(19)-(20)の定義に基づいて再解釈すると、トローゴットの“subjectification”とは、客観に基づく意味から、主観に基づく意味への意味変化である、とい

¹⁵ 主体／客体、主観／客観の再規定に関しては、野澤（2001, p.c.）や金丸（2001, p.c.）と交した議論が参考となっている。

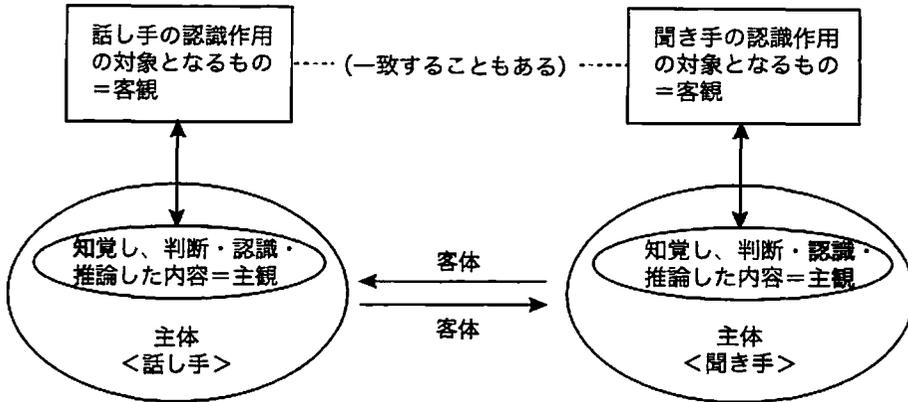


図6

うことができる。これを、意味の「主観化」と呼ぶことにする。

(21) トローゴットの "subjectification": 意味の主観化

しかし、このトローゴットの意味の主観化は、実は、主観 / 客観関係だけではなく、主体 / 客体の関係とも切り離してとらえることができない現象である。これは、トローゴットが発話の場における話し手 / 聞き手という社会的関係にも注目して言語表現の意味を分析していることから分かる。

ここで、助動詞の義務的用法と認知的用法における意味の違いについて考えてみよう。対象に対する話し手の判断、認識、推論を表わしているという点では、どちらの用法も主観的意味を表わす用法であるということができる。しかし、この2つには、明らかな違いがある。前者は、規則や規範などに基づいて、話し手だけでなく、その社会のほとんどの人が導き出すような社会的・一般的判断、認識、推論を表わしているのに対し、後者は、話し手自身の経験に基づいて、その話し手自身が個人的に導き出した判断、認識、推論を表わしている。つまり、この2つの主観的意味は、社会一般の主観であるのか、それとも、話し手という一個人の主観であるのかという点で異なるのである。もちろん、この両者は程度問題であり、より社会一般の主観であると解釈しやすいか、それとも、より話し手個人の主観であると解釈しやすいか、という問題であるが、この違いは、主体 / 客体関係に注目し、主体としての話し手の主観と客体としての聞き手や聞き手を含む社会一般の人々の主観とを比較したときに生じる主観性の度合いの違いである。このような主観的意味における主観性の度合いの違いは、トローゴットの理論の中では、意味的 - 語用論的傾向 I に基づく主観化 (言語主体一般の評価、知覚、判断などの内的状態を表わすようになること) であるのか、それとも、意味的 - 語用論的傾向 III に基づく主観化 (話し手の主観的な信条や態度などを表わすようになること) であるのか、という違いとして区別されているようである。

以上のことから、トローゴットのいう "subjectification" (意味の主観化) には、(20) で挙げた主観 / 客観関係だけでなく、(19) で挙げた主体 / 客体関係も関連していると思われる。トローゴットが主観 / 客観関係だけでなく、主体 / 客体関係にも注目した分析を行ってきたことは、彼女が "intersubjectification" という現象をも分析対象としてきていることから伺える。2.1 の (6) の定義から、"intersubjectification" とは、聞き手の主観に配慮した意味が言語表現の意味として表わされるようになる、という意味変化であると考えられる。したがって、本論では、このトローゴットのいう "intersubjectification" を「間主観化」と呼ぶことにする。

では、ラネカーのいう "subjectification" はどうだろうか。ラネカーのいう "subjectification" には、少なくとも以下の3つのタイプがあった。

- (22) (=17) a. 参照点の主体化
 b. 移動の主体化
 c. 力の主体化

これら3つの“subjectification”中で共通に見られたのは、行為者としての主語(トラジェクター)の行為コントロール力の消滅という点だけである。これを、(19)-(20)で規定した主体/客体、主観/客観の定義に基づいて再解釈すると、ラネカーのいう“subjectification”とは、結局、主体である話し手とその話し手の知覚、判断、認識、推論の対象(すなわち、話し手にとっての概念化の対象)との関係、すなわち、主体/客観関係が関わる意味変化であるといえる。

また、ラネカーの“subjectification”研究では、このトラジェクターの行為コントロール力の消滅に伴って、ある場合には、話し手の発話時における場所や話し手が存在している現実世界の今ある状況などが客観の中に入り込み、参照点としての役割を果たすようになるという変化が見られ、またある場合には、話し手の心的スキミングが客観の中に投影されるという変化が見られ、また、別の場合には、話し手自身の客観に対する心的推論が顕在化するという変化が見られた。この3つの変化を、さらに、(19)-(20)で規定した主体/客体、主観/客観の定義に基づいて再解釈すると、話し手の発話時における場所や話し手が存在している現実世界の今ある状況などが客観の中に入り込み、参照点としての役割を果たすようになるという変化と、話し手の心的スキミングが客観の中に投影されるという変化は、質は異なるものの、どちらも客観の一部が話し手(主体)に関わる何かによってかわるという変化、すなわち、「客観の主体化」であり、話し手の客観に対する心的推論が顕在化するという変化は、トローゴットの“subjectification”と同じタイプの意味変化、すなわち、「主観化」であるといえる。興味深いことに、ラネカーは、「主観化」の背後には、話し手が存在している現実世界の今ある状況が客観の中に入り込み、参照点としての役割を果たすようになるという意味での「客観の主体化」があると考えているようである。まだ議論の余地はあるが、主観化と主体化を結ぶ重要な指摘であると思われる。

以上のことから、トローゴットとラネカーの“subjectification”は、(19)-(20)で規定された主体/客体、主観/客観の概念を用いて次のように再解釈されると思われる。

(23) <トローゴットの“subjectification”>

- a. 主観化1:
 話し手を含む社会一般の主観を表わすようになること
 b. 主観化2:
 話し手個人の主観を表わすようになること

(24) <ラネカーの“subjectification”>

- a. 客観の主体化1:
 話し手あるいは話し手の発話時における場所や話し手と密接に関わる現状などが参照点として客観に入り込むこと
 b. 客観の主体化2:
 話し手が自分の心的スキミングを客観の中に投影すること
 c. 主観化(=トローゴットの“subjectification”):
 話し手の客観に対する認識、すなわち、主観が顕在化すること

4. 分析

ここでは、第3節で規定した主体/客体、主観/客観の概念に基づいて、いくつかの言語表現の意味の拡張現象を実際に分析していくことにする。その中で、(23)-(24)で示した主観化と主体化は、どのような語用論的推論や認知プロセスを介して起こるのか、また、主観化と主体化とはどのような関係にあるのか(ラネカーが示唆しているように、すべての主観化は、話し手が存在している現実世界の今ある状況などが客観の中に入り込み、参照点としての役割を果

たすようになるという意味での客観の主体化を介して起こるのか、等の問題を含む)、さらには、(23)-(24)で示した以外の主体化や主観化はあるのかなどについて考察していく。

4.1. *Look* の意味拡張：経験者の主体化によって起こる話し手の役割の二重性と意味の主観化
まず、*look* の意味変化を分析していくことにしよう。(25)に挙げたように、*look* は、「～に目を向ける」という意味をもとの意味とする言語表現である。

(25) The policeman *looked* suspiciously at the boy.

しかし、*look* は、この「～に目を向ける」という意味だけでなく、視覚的印象に関わる意味(「～に(と)みえる」)や話し手の推論に基づく意味(「～に(と)思われる」)をも表わすことができる。

(26) を見てみよう。

(26) <*look* の拡張用法>

- a. (形容詞句と)
The car *looked* so nice and white.
- b. (*like*-句と)
It *looks like* snow./They *look like* stars to the naked eye./He *looks like* winning.
- c. (*as if*-文と)
It *looks as if* it might snow./He *looked as if* he was going to smile.
- d. (名詞句と)
This flower *looks* a kind of rose.
- e. (*to*-不定詞と)
He *looks to* be in good health.
- f. (*like*-文と)
It *looks like* Warner Brother's gamble is paying off.

「～に(と)みえる」や「～に(と)思われる」の意味は、どちらも、話し手の主観に関わる意味である。よって、これらの意味への変化は、意味の主観化であるといえる。

神経心理学の知見を踏まえて考えると、これらの意味の成立の背後には、私たちの感覚・運動体系に基づく次のような一連の視覚経験があると考えられる。

(27) <*look* の意味拡張の背後にある視覚経験>¹⁶

- a. (運動)
ある対象あるいはある出来事に目を向ける
- b. (知覚)
その対象あるいは出来事の視覚的印象を得る
- c. (高次認知)
その対象あるいは出来事の視覚的印象からそれが何であるか判断したり、またそこからさらに何かを推論したりする

¹⁶*look* が、視覚的印象やそれを介した推論、推測を表わす意味を發展させているのに対し、*see* は、認識、把握、理解等に関わる意味を發展させている。この拡張された意味の違いは、両者のもとの意味の違いにある。*look* は、知覚対象に視線を向けただけで、知覚対象に視線が届いたことを必ずしも含意しないが、*see* は、知覚対象に視線が届いたことを含意する(グルーパー(Gruber (1967: 937-46, quoted by Yamanashi 1995: 224))参照)。知覚対象に視線が届けば、これを正しく把握し、理解することが可能になるが、知覚対象に視線を向けただけでは、知覚対象の視覚的印象を受け、そこから何らかの推論をすることはできず、これを正しく把握し、理解することはできない。したがって、視覚動詞 *see* の意味変化には、*look* とは少し異なる以下のような視覚経験が関わっていると思われる。

- (i) a. (運動)ある対象や出来事に目を向け、それを(完全に)視界に捉える
- b. (知覚)その対象や出来事の視覚情報を得る
- c. (高次認知)その対象やその出来事を理解し、それらについて何らかの推論を行う
- d. (運動)その対象あるいは出来事に対処する

d. (運動)

その対象あるいは出来事に対処する

私たちは、この視覚経験を日常的に経験している。よって、私たちは、ある人の「Xに目を向けた」という発話を聞いただけで、その人が何らかの対象あるいは出来事の視覚的印象を得、その対象あるいは出来事をXと判断し、そこからさらに何らかの推論をし、その対象あるいは出来事に何らかの対処をしたであろうと語用論的に推論することができる。この語用論的推論がくり返されると、この推論パターンは自動的なものとなる。結果として、言語表現の意味としては副次的な意味であったこの推論の一部に関する意味が顕在化することになる。lookの場合には、(27)で挙げた一連の視覚経験にそって、まず、<目を向ける>という運動と密接に関連する<視覚的印象を得る>という知覚に関する部分が顕在化し、結果、「～に(と)みえる」の意味が発展した。そして、その後、さらにそれと密接に関わる<判断したり推論したりする>という高次認知に関わる部分が顕在化し、結果、「～に(と)思われる」の意味が発展したようである(OED参照)。

ところで、次の例にみるように、「～に(と)みえる」の意味は、look as ~の形式で現れたのがはじめだったようである。

(28) Hi sul ... lok as bestis pat cun no witte. (a1300 VX Signa 56 in E.E.P. (1862) 9)

また、次に挙げたように、形容詞句をとる look の用法の OED における初出例が as-句と共に起している点から考えても、「～に(と)みえる」の意味の成立における as-句の影響を見逃すことはできない。

(29) Yimages ... Lokend full hyuely as any light angels. (c1400 Destr. Troy 8742)

as-句は、1200年頃には、likeと同じ<～のように>という意味を確立している(このlikeとの意味の類似性のせいで、現在では、lookは、as-句ではなく、like-句と共に起している)。これは、主観的な意味のひとつと考えられる。なぜなら、ある対象Xについて<～のよう>と判断しているのは、話し手自身だからである。したがって、lookにおける、「～に目を向ける」という意味から「～に(と)みえる」という主観的な意味への転換には、上述した知覚経験に基づく語用論的推論だけでなく、このような主観的な意味を表わす語との共起が、大いに貢献していたであろうと思われる。

では、lookの意味変化には、いかなる客観の主体化も見られないのであろうか。ここで、(30a)と(30b)を比較してみよう。

- (30) a. John looks smart to {me/ us/ her/ him/ them}.
b. John looks smart.

どちらも「～に(と)みえる」あるいは「～に(と)思われる」という主観的な意味を表わしている。違うのは、経験者(toの後の名詞句が示している)が明示的に表わされているか否かという点だけである。(30a)では、経験者が明示的に表わされているのに対し、(30b)では経験者は明示的には示されていない。(30b)における経験者は、話し手が話し手を含む一般的・総称的な人々と解釈することができる。ラネカー(Langacker 2001, p.c.)は、この(30a)から(30b)への意味拡張を、経験者の"subjectification"((19)-(20)で規定した主体/客体、主観/客観の定義に基づいて再解釈すると、これは「客観における経験者の主体化」となる)であるという。¹⁷

しかし、歴史的観察(OEDのlookの記述)から、<目を向ける>の意味から、まず発展したのが、(30b)のようなto-句をとらない<{私/私を含むみんな}には)～に(と){みえる/思われる}>の用法であり、その後、(30a)のようなto-句を用いて知覚者を明示的に表わす<Xに

¹⁷ この経験者の主体化は、acrossの意味変化に見られた参照点の主体化と類似の現象とも考えられる。なぜなら、経験者を、ジョンという客観的な対象を特徴づけるための参照点として考えることも可能だからである。

は～に(と){みえる / 思われる}>の用法が成立したことが分かる。つまり、look の<～に(と){みえる / 思われる}>の用法においては、経験者の主体化ではなく、経験者の顕在化という過程がみられるのである。look のこの意味変化はどのように説明されるべきであろうか。

ここで、知覚者が話し手あるいは話し手を含む一般的・総称的な人々である(これは、知覚者(=経験者)の主体化といえる)という限られた文脈を考えてみよう。この場合、話し手は、2重の役割を担っていると考えられる。客観の中の一対象である知覚者という立場と、概念化し言語化する主体としての立場の2つである。前者の立場をとった場合、話し手は、*I looked at John*のように語ることになる。しかし、後者の立ち場をとった場合、話し手は語られる対象ではなく、語る対象として客観の外に出ることになる。語られる対象ではないということは、語られる事態においては背景化した対象となっていると考えられる。この話し手の背景化という認知プロセスによって、話し手は、自分の<対象に目を向ける>という知覚行為ではなく、知覚対象の様子を語るようになる。その結果成立したのが、*to*-句をとらない<{私 / 私を含むみんな}には>～に(と)みえる>の意味を表わす look の用法と考えられる。

この用法の成立後、*to*-句を用いて知覚者を明示的に表わす用法が成立する。この発展には、look が、上述した語用論的推論を介して、より高次の認識に基づく意味(<{私 / 私を含むみんな}には>～に(と)思われる>の意味)をも表わせるようになったことが関与していると思われる。対象の視覚的印象であれば、同じ人間である以上、ほぼ同じ印象を持つと予想できるのに対し、対象の判断や認識は、話し手と他者とで異なることが多い。結果として、話し手は、自分の主観であることを明示的に示すことが必要になる。そこで成立したのが、*to*-句を用いて知覚者(認識者)としての自分を明示的に示す以下のような用法である。

- (31) a. It looks to me to be narrow and pedantic, to apply the ordinary ideas of criminal justice to this great public contest.

(1775 BURKE *Sp. Conc. Amer. Sel. Wks.* I 192)

- b. It looks to me as if I were in a great crisis. (1790 BURKE *Fr. Rev.* (1898) II)

これらは、*to*-句を用いて知覚者(認識者)を表わす look の用法の中で最も早い時期に成立したものである。look が、話し手以外のさまざまな知覚者(認識者)の主観を *to*-句を用いて表せるようになるのは、かなり後になってからのようである。一例として次の例を挙げておく。

- (32) Don't it look to you like she would of asked us to stay for supper?

(1936 M. MITCHELL *Gone with Wind* I. i. II)

以上のことから、look の意味変化をまとめると以下のようなようになる。

(33) <look の意味変化>

1. もとの<目を向ける>の意味(トラジェクター=知覚者≠話し手)
John looked at the boy.
↓ [知覚者の主体化(話し手が客観に入り込むこと=客観の主体化1)]
2. <目を向ける>の意味(トラジェクター=知覚者=話し手)
I looked at John.
↓ [知覚者(=話し手)の背景化]、[語用論的推論(27a=>27b)]
3. <～に(と){みえる}>の意味(知覚者=話し手)
John looked smart.
↓ [語用論的推論(27b=>27c)] => [話し手の主観であることを明示化する必要性]
4. <～に(と){みえる / 思われる}>の意味(知覚者=話し手)
John looked smart to me.
↓ [話し手以外の知覚者の主観を示す言語表現への拡張]
- 4'. <～に(と){みえる / 思われる}>の意味(知覚者≠話し手)
John looked smart to Mary.

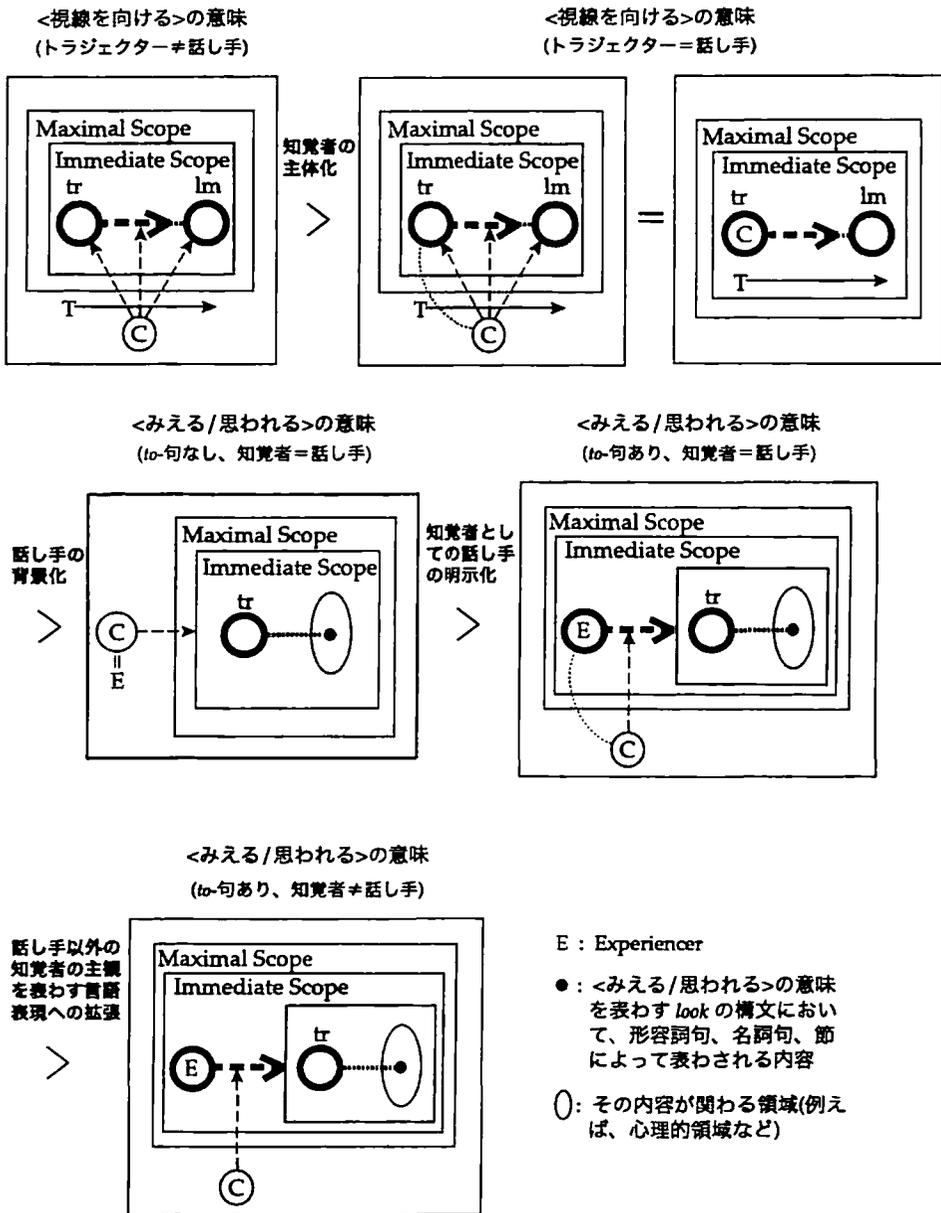


図7

以上のように、look の場合、意味の主観化が起るためには、まず、話し手が客観の中の一対象である知覚者となるという変化、すなわち、客観における知覚者の主体化が起り、次に、語る主体と語られる対象という2つの役割を担うことになった話し手が、語る対象としての役割だけに徹するようになるというプロセスが起らなくてはならなかったことが分かる。このような主観化と主体化、あるいは、主体化と発話場面における話し手の役割の二重性との関係は、これまでの "subjectification" 研究においては議論されてこなかった点である。

最後に、(26)で挙げたさまざまな構文が、歴史的にどのような順で成立してきたかを述べて

おく。それによれば、*as*-句をとる(28)の構文が成立した後、形容詞句をとる構文((26a)の例)や*like*-句をとる構文((26b)の例)、*as if*-文(古くは*as*-文)をとる構文((26c)の例)が発展したようである。その後、名詞句をとる構文((26d)の例)が発展し、近代に入ってから、(26d)のような*to*-不定詞をとる構文が、そして、ごく最近になって、(26e)のような*like*-文をとる構文が発展してきたようである。

このような構文の発展を説明するためには、意味変化だけでなく、他の類似表現との関連をみていくことが必要である。Taniguchi(1997b)は、形容詞句や名詞句をとる構文が、*look*よりも早い時期にこのような構文を成立させていた他の知覚表現 *smell*, *sound* からの類推によって成立したものであることを、また、深田(2001)は、それに加えて、これらの構文の成立には、<〜に(と)みえる>の意味の成立によって、意味的に近くなった *seem* 構文からの類推も関与している—*seem* も *look* 以前にこの構文を発展させている—ことを示している。また、*to*-不定詞をとる構文や *like*-文をとる構文は、意味的に近くなった *seem* のとる構文からの類推によって発展してきたものと考えられる(*to*-不定詞をとる構文については、Taniguchi 1997b や深田 2001 参照)。

しかし、いくら *seem* と意味が近くなったからといっても、*look* においては、*that*-節をとる構文への拡張は見られない。これは、*look* がもともと<ある対象に目を向ける>ことを示す言語表現であって、その対象を正確に捉えたことまでは意味しない言語表現であることに起因していると思われる(注16を参照のこと)。意味が拡張しても視覚的印象やそれに基づく漠然とした判断や認識しか表わすことのできない *look* が、明確な判断内容を示す *that*-節をとることはできないのである。

4.2. *Appear* の意味拡張：対象志向から主体志向へという視点の転換と意味の主観化

次に、*appear* の意味拡張を分析していくことにしよう。*appear* は、*look* と同様、<〜と思われる>の意味を発展させてきている。しかし、その意味拡張の背後にある認知プロセスは、*look* の場合とは随分異なるようである。

OEDによれば、*appear* は、本来、(34)に挙げたように、普通は目に見えないはずの対象(例えば、亡霊や天使等)が目の前に現れたことを表わすために用いられる言語表現であったようである。

(34) The ghost *appeared* to him again.

その後、*appear* は、それまで見ていなかった対象が(突然)目の前に現れるという状況全般を表わすために用いられるようになるのだが、それだけでなく、さらに、次に挙げたような様々な意味・構文をも発展させてきている。

(35) <*appear* の拡張された意味>

a. <〜は明らかである>の意味

It *appears* from the evidence that John is guilty.

b. <〜とみえる>の意味

He is anxious to *appear* a gentleman.

He *appears* smart.

c. <〜と思われる>の意味

(i) ([It + *appear* + that...], [It + *appear* + 形容詞 + that...] の構文で)

It *appears* that some missiles have been moved.

It *appears* unlikely that the UN would consider making such a move.

(ii) (形容詞句あるいは名詞句とともに)

He *appeared* willing to reach an agreement.

The executive presidency is beginning to *appear* a political irrelevance.

(iii) (*to*-不定詞とともに)

He *appears* to have been rich.

The importance of the problem *appears* to be realized by Sam.

There *appears* to be increasing support for the leadership to take a more aggressive stance.

歴史的な観察から、上述した拡張用法の中で、まず、<～は明らかである>の意味を表わす [It + appear + that...] の構文 (例文 (35a)) が発展したことが分かる。この拡張された意味は、より正確には、「分からなかったものが分かるようになる」という意味である。appear が、本来、「目に見えないはずのものが見えるようになる」という意味を表わしていたことから考えると、この拡張された意味への変化は、物理空間領域への対象の出現から心理的空間領域への事柄の出現へというメタファー的拡張であると考えられる。

その後、[It + appear + that...] の構文は、<～と思われる>の意味を発展させた。この意味は、他者の主観への話し手の配慮を顕在化させた意味、つまり、間主観化によって成立した意味といえる。一般に、話し手にとって明らかなことであっても、他人にとっては明らかではないことはよくある。話し手は、自分と異なる主観を持っている可能性の高い他者に自分の主観をうまく伝えるために、その他者の主観に配慮していることを示す必要が生じる。この結果成立したのが、この<～と思われる>の意味である。

次に、<～とみえる>の意味を表わす形容詞をとる構文 ((35b) の用法) であるが、この用法は、<～は明らかである>の意味への拡張とは別の拡張過程を経て発展してきたようである。¹⁸ 前述したように、appear は、本来、普通は目に見えないはずの亡霊や天使等の対象が目の前に現れたことを表わす言語表現であった。図8は、この appear が表わす事態を图示したものである。

Appearが表している事態

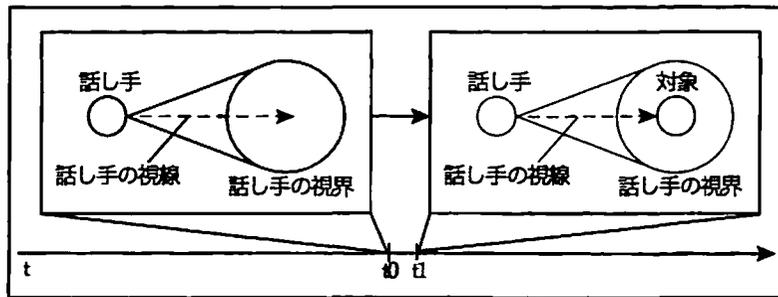


図8

ここで、この事態を知覚者である主体(話し手)の側から捉え直してみると、「普通は目に見えないはずの亡霊や天使等の対象が見えた」という主体的意味—これは主観的意味でもある—が浮かび上がる。つまり、Fukada (1999a) や深田 (2001) でも主張したように、appear は、本来、<～が目の前に現れる>という対象的(客観的)意味と<～が見える>という主体的かつ主観的意味とを合わせ持った言語表現なのである。<～とみえる>の意味の成立には、対象志向から主体志向への視点の転換に伴う、この主体的かつ主観的意味の前景化というプロセスが関与していたと考えられる。これは、一種のプロファイル変換と呼べるかも知れない。

しかし、主体的かつ主観的意味の前景化というプロセスだけでは、<～が見える>という意味にしかない。<～とみえる>の意味が成立するためには、look の意味変化の際にも挙げた視覚経験とそれに基づく語用論的推論を考慮する必要がある。私たちは、ある対象を見た時、即座に、その対象がどのようなものであるかを分析し、それが何であるか認識する。つまり、見るという行為が行われたのとほぼ同時に、対象についての分析や認識が始まるのである。この経験

¹⁸ 成立時期は、<～は明らかである>の意味を表わす [It + appear + that...] の構文成立の少し後である。

よって、*appear* は、<現れる>という対象の出現の意味から<～とみえる>という見えた対象の様態に関わる意味を発展させることができたと思われる。つまり、<～とみえる>の意味は、<～が現れる>という対象の意味の背後にあった<～が見える>という話し手の主体的かつ主観的意味の前景化と、ある対象の出現とメトニミーに関係づけられるその対象についての話し手の分析・判断に関わる意味の顕在化という2つのプロセスを介して成立した意味なのである。

この形容詞句をとる構文は、さらに、名詞句をとる構文へと発展している。これは、類似の意味を表わす *seem* 構文の影響を受けたものと思われる。また、<～と思われる>の意味の成立に関しては、*seem* の影響が構文の拡張だけでなく意味の拡張にまで及んだ、とも、また、聞き手の主観を配慮した話し手の含意が言語表現の意味として表わされるようになった(つまり、間主観化した)、とも考えられる。いづれにせよ、この意味の成立により、*appear* の意味はますます *seem* に近いものとなり、結果として、*to*-不定詞をとる構文や、[*It + appear + 形容詞 + that...*] の構文などへの構文の拡張が起こったと推測される。先に述べた [*It + appear + that...*] の構文における<～と思われる>の意味への拡張にも、おそらく、間主観化だけでなく、この *seem* 構文からの類推もあるのだろう。

図9は、以上のような *appear* の意味・構文の拡張過程をまとめたものである。

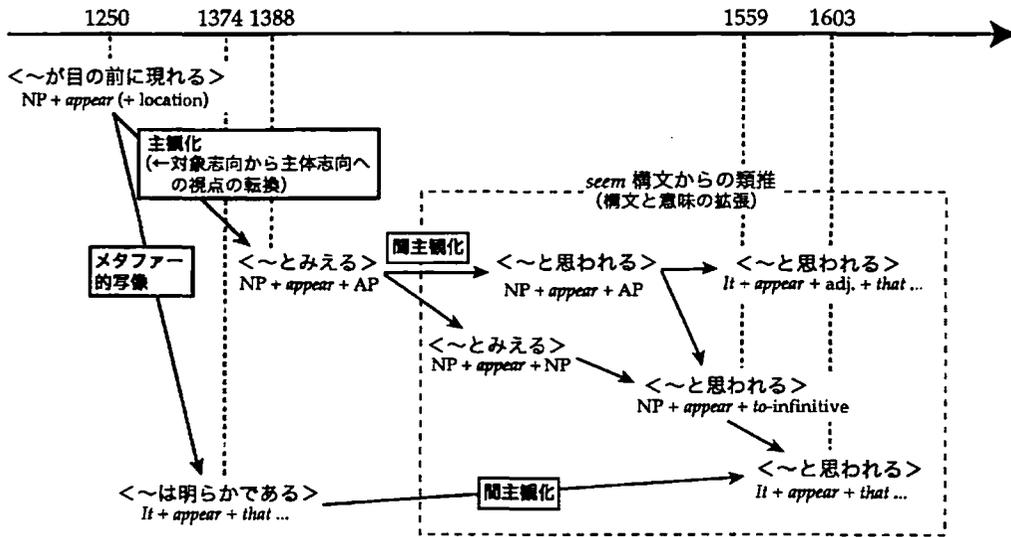


図9

最後に *appear* と *look* の意味変化に関わる認知プロセスの違いについて述べておく。両者とも、<～と(に)みえる>の意味を発展させてきているといえるが、そこに関わる認知プロセスは異なる。*look* の場合には、客観に入り込んだ主体が背景化することによってこの意味が成立したのに対し、*appear* の場合は、もとの客観的意味の背後にあった主体的意味が前景化することによってこの意味が成立したのであった。このことは、主体化あるいは主観化の背後に、常に一定の認知プロセスが関与しているわけではないこと、言い換えれば、主体化あるいは主観化の背後には、言語表現ごとに異なる認知プロセスが関与している可能性が高いことを示唆している。

4.3. *Be Bound to* の意味拡張：語用論的推論と力の源の主体化

次に、*be bound to* の話し手の未来状況予測の意味の成立について考えてみよう。*bind* は、本来、<(ひもや足かせなどで)(囚人等を)動けなくさせる>という物理的領域における意味を表わす

語である。よって、*be bound to* のもとの意味とは、次の例にみるように、<ひもや足かせなどで>きつく縛られて動けなくさせられる>という意味であったと考えられる。この用法は、10世紀の終わりごろ成立したものである(OED 参照)。

(36) He *was bound to* a chair and left.

ひもや足かせなどで<動けなくさせられる>ということは、物理的空間における自由を奪われるということである。この物理的空間における自由を奪われるという意味が社会的空間へとメタファー的に写像されると、以下のような用法が成立する。

- (37) a. He *was bound to* the judge.
 b. He *was bound to* secrecy.
 c. They *are bound to* hard work.

これらの例において、*be bound to* は、トラジェクターがある権力や規則等によって<社会的に縛られている>ことを表わしている。OED によれば、この意味の成立は、14世紀中頃のことであるらしい。

注目したいのは、この意味の成立後、*to-*不定詞をとる(38)のような用法が成立したということである。

- (38) a. He *was bound by* the contact *to pay* damages.
 b. She *is not legally bound to pay* the debts.

これらの例において、*be bound to* は、トラジェクターが<(ある社会的権力や規則等によって)~するように義務づけられている>こと、言い換えれば、トラジェクターが<~する義務がある>ことを示している。

この*to-*不定詞をとる *be bound to* は、さらに、次の例に見るような、<きつと~する>という話し手の未来状況予測の意味、すなわち、主観の意味を発展させている。

- (39) a. We'll have more than one children, and one of them's *bound to* be a boy.
 b. There *are bound to* be price increases next year.

これらの例において、*be bound to* は、話し手が運命だと思い込んでいる未来の状況や、話し手が現実をみて論理的に判断した、あるいは、話し手が第六感で感じた未来の状況を表わすために用いられている。

一見すると、この意味は、<自由を奪われる>というもとの物理的領域における意味が心理的領域へと写像されることによって成立した意味であると思うかもしれない。確かに、*to-*不定詞をとる *be bound to* で表わされる未来の状況とは、話し手がかなり信じ込んでいる未来の状況であり、話し手は、その未来の状況に心理的に縛られていて、他の状況を予測するという心理的自由を奪われていると解釈できる。しかし、このことは、*to-*不定詞をとる *be bound to* の用法が、もとの<自由を奪われる>という意味を漠然とはあるが保持しているということを示してはいても、その意味がメタファー的写像によって成立したことを示しているわけではない。もし、単純に、<自由を奪われる>というもとの物理的領域における意味を心理的領域にメタファー的に写像するとしたら、成立するのは、次の例に見るような、トラジェクターが<~に心理的自由を奪われている>(<~に心理的に縛られている>) という意味になるはずである。

(40) He *is much bound to* her.

この文では、トラジェクターである彼が彼女(母親)から心理的に離れられないこと、すなわち、トラジェクターである彼が母親に心理的に縛られていることが表わされている。この意味こそ、もとの意味の心理的領域へのメタファー的写像によって成立した意味であると考えられる。

しかし、*to-*不定詞をとる *be bound to* の用法において心理的自由を奪われているのは、トラジェクターではなく、話し手である。よって、この意味の成立を説明するためには、メタファー的

写像ではなく、別の認知プロセスを考慮する必要がある。ここで、(38)のような例における *be bound to* の意味とその含意について考えてみよう。誰かが<~するように義務づけられている>あるいは<~する義務がある>場合、私たちは、その人がきつとそれをするだろうと推論する。つまり、私たちは、(38)のような例を聞く度に、「Xが何かをする義務があるのなら、Xはきつとそれをする」という語用論的推論を行っていると考えられる。何度となく同じ推論が行われることによって、本来含意であった帰結の部分がその言語表現の意味として確立することはよくある(*be going to*における未来の意志の意味の成立など)。*be bound to*の場合も同様で、「Xが何かをする義務があるのなら、Xはきつとそれをする」という語用論的推論がくり返されることにより、本来含意であった帰結の部分(「きつと~する」の部分)が前景化し、結果として、<きつと~する>という話し手の未来状況予測の意味を表わすようになったと考えられる。

ここで、*be bound to* の、物理的束縛の意味を表わす用法、社会的制約の意味を表わす用法、<きつと~する>の意味を表わす用法、のそれぞれにおける力の源について考えてみよう。

- (41) a. (物理的束縛の意味)
He *was bound to* a chair and left.
b. (社会的制約の意味)
(i) He *was bound to* secrecy.
(ii) She *is not legally bound to* pay the debts.
c. (<きつと~する>の意味)
There *are bound to* be price increases next year.

物理的束縛を表わす(41a)における力の源は、明示的に示されていないが、客観の中の具体的な人であると予想される。しかし、社会的制約の意味を表わす(41b)における力の源は、契約、約束、権威、義務等の社会的力であり、<きつと~する>の意味を表わす(41c)にいたっては、その力の源は、今現在の状況や知識、第六感に基づく話し手の心的推論という非常に抽象的なものである。これは、助動詞の認識的用法の成立に見られたのと同じタイプの力の源の主体化である。つまり、上述した「Xが何かをする義務があるのなら、Xはきつとそれをする」という語用論的推論の帰結部分の顕在化というのは、力の源の主体化(力の源が話し手(=主体)となること、第3節(24)の客観の主体化1)と共起して起こる現象なのである。図10(次ページ参照)に、*be bound to*における意味変化(41a)-(41b-i)-(41b-ii)-(41c)を、ラネカーの図式を用いて図示してみる。

さらに、(41c)の意味の成立とともに、次のような再分析もあったと考えられる。

[[*be bound*][to(目的句)]]<~するように義務づけられている>

↓

[[*be bound to*][動詞の原形]]<きつと~する>

この再分析があったからこそ、(41c)の *be bound to* は、(40)のように、もとの意味をかなり保持した意味、すなわち、<~するように心理的に縛られている>の意味を表わすことにはならなかったと思われる。

4.4. 行為(temporalな意味)から状態(atemporalな意味)へ: 視線の移動と体感の投射

次に、*hug*の意味拡張についても考えてみよう。

- (42) a. She *hugged* the chick to her cheek.
b. The road *hugs* the coastline.

(42a)の *hug* は、トラジェクターである彼女がひなどりを抱いたという客観的事態を表わしている。そのような場合、彼女とひな鳥との間には、抱くという行為を介した物理的関係がある。では、(42b)はどうだろうか。(42b)では、トラジェクターである道が海岸線を(彼女がひなどりを抱いているのと同じように)抱いているわけではない。海岸線との関係で記述されるよう

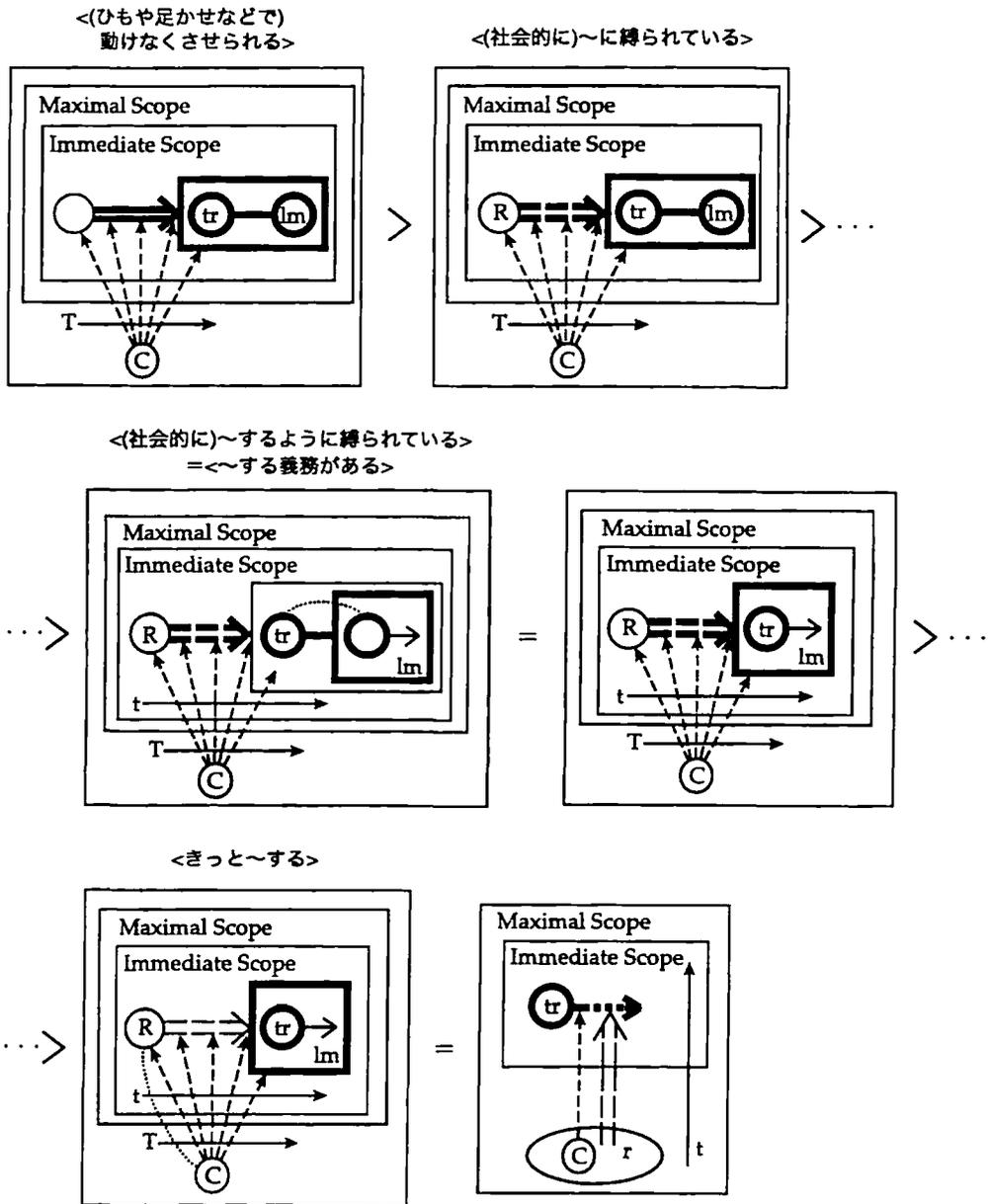


図10

な道のある状態を示しているのである。

しかし、なぜ道と海岸線とを関係づけるのに *hug* という語が用いられているのであろうか。おそらく、次の2つの説明が可能だろう。まず第1に、話し手が、誰かが何か抱く姿を観察する時に走らせると同じ視線の移動を、道を心的にたどるときにも経験したために *hug* という語が用いられたとする説明が考えられる。第2に、話し手自身が実際に何かを抱く時に感じるのと同じ体感を道と海岸線との間に見出した、言い換えれば、話し手自身が何かを抱く時に感じる、自分と抱いている対象との関係を、道と海岸線との関係に投射したために *hug* という

語が用いられたとする説明も考えられる。いずれにせよ、(42b)の *hug* の意味は、心的スキャニングや体感のような主体的な事柄が顕在化することによって成立した意味であると考えられる。したがって、(42b)のような *hug* の意味は、話し手が心的スキャニングを客観の中に投影するという意味での客観の主体化(これは、(24)で挙げた客観の主体化2である)、あるいは、話し手が自らの体感を客観の中に投影するという意味での客観の主体化(これを客観の主体化2'とする)を介して成立した意味であるといえよう。

同じような拡張は、日本語の「抱く」にも見られる。

(43) 静かな山々に *抱*かれたまち、大屋町。

また、日本語の「はねている」の意味にも、話し手が心的スキャニングや体感を客観の中に投影するという意味での客観の主体化がみられる。次の2つの例をみてみよう。

- (44) a. うさぎがびよんびよんはねている。
b. 髪の毛がはねている。

(44a)の「はねている」は、トラジェクターであるうさぎの実際の行為を表わしている。しかし、(44b)の「はねている」は、トラジェクターである髪の毛の実際の行為を表わしているわけではない。(44b)は、トラジェクターである髪の毛のある状態を表現しているのである。この例も、話し手が、うさぎのような物理的対象が実際にはねている様子を観察する時に走らせるのと同じ視線の移動を、髪の毛の流れを心的にたどるときにも経験したために、「はねている」という語が用いられたとも、また、話し手自身が実際に飛び跳ねた時に感じるのと同じ体感を髪の毛の状態の中に見出したために「はねている」という語が用いられたとも考えられる。ゆえに、この例も客観の主体化2と客観の主体化2'によって成立した意味であるといえよう。

これらは、体感が関与しているか否かの違いはあるものの、主体移動を表わす次のような例と類似の現象であると考えられる。

- (45) a. Beyond the 2000 meter level, the trail {*rises/falls/ascends/descends*} quite steeply.
b. The new highway {*goes/runs/climbs*} from the valley floor to the senator's mountain lodge.

- (46) a. 山脈が東から西に *走*っている。
b. 半島が東に *延*びている。

(42b)の *hug* や(44b)の「はねている」の用法を含め、これらの例に共通しているのは、トラジェクターの行為(あるいは行為の継続)ではなく、トラジェクターの状態を表わしているという点である。どうやら、話し手の心的スキャニングや体感が客観の中に投影されるという意味での客観の主体化が起ると、概念化の対象(客観)は、過去から現在、未来へと流れる現実の時間の流れとは切り離され、結果として、その言語表現は、話し手の意識と密接に関連するアスペクト的な意味を顕在化するようになる、という傾向があるようである。これは、この客観の主体化が概念化の過程で起こる心的操作のひとつであるからかもしれない。

しかし、概念化の対象が現実の時間の流れと切り離されるという現象は、実は、話し手が参照点あるいは知覚者として客観に入り込む、あるいは、話し手と密接に関係する現状が参照点として客観に入り込むという意味での客観の主体化(客観の主体化1)が起こった場合にも、同様に見られる(*across, be going to, look, appear, be bound to*の意味変化や助動詞の認識的用法の成立を参照のこと)。このことは、アスペクトの意味(これも主観的意味のひとつということができるかもしれない)の発現を、客観の主体化との関係で分析していける可能性を示していると思われる。

5. おわりに

本論では、まず、トローゴットとラネカーの研究において“subjectification”と呼ばれて分析されてきた現象に注目し、それらがどのようなものであるのか、また、それらがどのような関

係にあるのかを、発達心理学や神経心理学の知見をもとに再規定された主体/客体、主観/客観の概念を用いて明らかにしようと試みた。その結果、トローゴットが "subjectification" と呼んで分析してきた現象は、すべて意味の主観化として再解釈できたのに対し、ラネカーが "subjectification" と呼んで分析してきた現象の中には、客観の主体化として再解釈できるものと意味の主観化として再解釈できるものの2つが存在することが明らかになった。

また、これらの先行研究を再解釈していく中で、主観的意味の中にもより主観的なもの(より話し手個人の主観であると解釈されやすいもの)ものとそうでないもの(より社会一般の主観であると解釈されやすいもの)があること、また、意味の主観化の背後には、話し手が存在している現実世界の今ある状況が客観の中に入り込み、参照点としての役割を果たすようになるという意味での客観の主体化があると考えられること、なども明らかになった。

さらに、さまざまな言語事例を具体的に分析していく中で、(i) もとの意味と密接に関連する私たちの日常経験の中に、知覚や高次認知といった主観に関連した部分があるからこそ、意味の主観化が起こること (*look, appear* の意味変化)、(ii) 話し手自身が知覚者として客観に入り込むこと(知覚者の主体化)によって起こる意味の主観化もあること (*look* の意味変化)、(iii) もとの意味が示す事態の中にすでに知覚者として話し手が入り込んでいるために、対象中心から話し手中心へと視点を変えることによって、主体的かつ主観的意味が顕在化することもあること (*appear* の意味変化)、(iv) 力の源が話し手の心的推論になるという意味での力の源の主体化によって起こる意味の主観化は、*be going to* の近未来の意味の成立や助動詞の認識的用法の成立だけでなく、*be bound to* の意味変化にもみられること、(v) 主体化や主観化が起こる基盤として、その言語表現が用いられるコンテキストやそこから導き出される語用論的推論を無視することはできないということ (*look, appear, be bound to* の意味変化)、(vi) 話し手の心的スキャニングを客観の中に投影するという意味での客観の主体化と類似する現象として、話し手の体感を客観の中に投影するという意味での客観の主体化もあること (*hug*、「はねている」の意味変化)、(vii) 状態というアスペクト的意味の顕在化は、客観の主体化と密接に関連しあっていること (*hug*、「はねている」の意味変化)、等が明らかになった。

しかし、主観化や主体化とメタファー/メトニミーを介した意味変化との関係が明らかになってはいないし、4.4 で述べた客観の主体化と状態の意味の顕在化との関係に関しても十分な説明がなされたとは言いが切れない。これらの問題を解決するためにも、今後もさまざまな言語事例を詳細に研究していく必要があると思われる。

参考文献

秋元実治

2001. (編著)『文法化: 研究と課題』、英潮社。

Asakawa, Teruo

1994. "Lexical Extension of the Verbs of Appearance." in Chiba Shuji et al. (eds.) *Synchronic and Diachronic Approach to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion on His Sixtieth Birthday*. Tokyo: Liber Press, pp.309-326.

Claudi, Ulrike, and Bernd Heine

1986. "On the Metaphorical Base of Grammar." *Studies in Language* 10, pp.297-335.

Fukada, Chie

1996a. "On Semantic Extensions of Verbs of Appearance: A Metaphor from Appearance in Physical Space to Appearance in Mental Space." *Papers in Linguistic Science* 2, pp.63-86.

1996b. "A Cognitive Analysis of There-Constructions: With Special Reference to 'Subjectification.'" *Proceedings of the Twentieth Annual Meeting of Kansai Linguistic Society*, pp.45-54.

1997. "Semantic Extension and Structural Change of Perception Verbs." Paper presented at the Workshop on Meanings and Structures of Verbs, The Twenty-Second Annual Meeting of Kansai Linguistic Society, Kyoto University.
- 1999a. "A Cognitive Approach to the Semantic Extension of *Appear*." *Papers from the 16th National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, pp.21-30.
- 深田智
- 1999b. 「モノの出現とその知覚・認識：*Appear* の意味拡張を中心に」、第2回認知言語学フォーラム、口頭発表、京都大学。
2001. "Subjectification, Metaphor, and Metonymy." 日本英語学会第19回大会ワークショップ『主体化と意味拡張のダイナミズム：ユニフィケーションに向けて』、口頭発表、東京大学（駒場キャンパス）。
- Gibbs, Raymond W. Jr.
1999. "Speaking and Thinking In Metonymy." in Klaus-Uwe Panther and Güter Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam: John Benjamins, pp.61-76.
- Gruber, Jeffrey
1967. "Look and See." *Language* 12, pp.513-527.
- 浜田寿美男
1995. 『意味から言葉へ：物語の生まれるまえに』、ミネルヴァ書房。
- Haspelmath, Martin.
1999. "Why is Grammaticalization Irreversible?" *Cognitive Linguistics* 37 (6), pp.1043-1068.
- Heine, Bernd
1997. *Cognitive Foundations of Grammar*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünne Meyer
1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hopper, Paul and Elizabeth Closs Traugott
1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 河上誓作
1996. (編著) 『認知言語学の基礎』、研究社。
- Keller, Rudi
1994. *Language Change: The Invisible Hand in Language*. London: Routledge.
- Kuno, Susumu
1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse, and Empathy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson
1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W.
1987. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
1988. "A View of Linguistic Semantics." in Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 49-90.
- 1990a. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton

- de Gruyter.
 1990b. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1 (1), pp.5-38.
 1991. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. II. Stanford: Stanford University Press.
 1997. "Losing control: Grammaticization, Subjectification, and Transparency." 第6回 CLC 言語学集中講義、園田学園女子学園。
 1998. "On Subjectification and Grammaticization." in Jean-Pierre Koenig (ed.) *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*. Stanford, Calif.: CSLI Publications, pp.71-89.
 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Lindner, Susan
 1982. "What Goes up doesn't Necessarily Come down: The Ins and Outs of Opposites." *Papers from the Eighteenth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, pp.305-323.
- 中村芳久
 2000. 「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」、『金沢大学文学部論集(言語・文学篇)』、No.20、pp.75-103。
 2001a. 「二重目的語構文の認知構造：構文内のネットワークと構文間のネットワークの症例」、『認知言語学論考』、No.1、pp.59-110。
- Nakamura, Yoshihisa
 2001b. "De-subjectification as a Backstage Cognition to Explain Various Linguistic Constructions," ms., Kanazawa University.
- Panther, Klaus-Uwe and Günter Radden
 1999. *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik
 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sekuler, Robert and Randolph Blake
 1994. *Perception*, 3rd. edition. New York: McGraw-Hill.
- Stein, Dieter
 1995. "Subjective Meanings and the History of Inversions in English." in Dieter Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivization: Linguistics Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.129-150.
- Sweetser, Eve E.
 1990. From *Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard
 1988. "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science* 12, pp. 49-100.
- Taniguchi, Kazumi
 1997a. "On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs." *Papers from the Fourteenth National Conference of the English Linguistic Society of Japan*, pp.221-230.
 1997b. "On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective." *English Linguistics* 14, pp.270-299.
- Taylor, John R.
 1989. *Linguistic Categorization*. Oxford: Clarendon Press.
- Traugott, Elizabeth Closs

1988. "Pragmatic Strengthening and Grammaticalization." *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp.406-416.
1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language* 65 (1), pp.31-55.
1995. "Subjectification in Grammaticalisation." in Dieter Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivization: Linguistics Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.31-54.
1999. "From Subjectification to Intersubjectification." Paper presented at the Workshop on Historical Pragmatics in the Fourteenth International Conference on Historical Linguistics, Vancouver.
2000. "'Promise' and 'Pray'-Parentheticals." Paper presented at the Eleventh International Conference on English Historical Linguistics, Santiago de Compostela.
- Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König
1991. "The Semantic-Pragmatics of Grammaticalization Revisited." in Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins, pp.189-218.
- 山梨正明
1995. 『認知文法論』、ひつじ書房.
2000. 『認知言語学原理』、くろしお出版.